

巻頭言

プログラムマネジメントの時代

国際 P2M 学会 副会長 久保裕史

激動の一年も、残り僅かとなりました。2020 年は、世界的にも個人的にも記憶に残る年です。個人的には、3 月末に第二の定年退職日を迎えました。大学での 10 年間にため込んだ研究室の蓄積物はあまりにも膨大で、その片付け作業で疲労困憊でした。プロジェクトマネジメント学科で教鞭を執る身でありながら、納期確定プロジェクトへの備えが疎かであったことに、反省しきりです。準備不足のうえに、突然の「コロナ禍」が輪を掛けました。社会的には 10 数年前からパンデミック襲来が予期されながらも、実質的には無防備のままでした。大学も教員も、突然のオンライン授業対応を迫られて、右往左往の状態でした。

本学会も同様で、私が担当している大会企画は、千葉工大での春季大会が開催中止に追い込まれました。それでも何とかその危機を乗り越えて、予稿集と論文誌の発行に漕ぎ着けられたのは、ひとえに会員と学会関係者の尽力の賜です。

今年 10 月の早稲田大学での秋大会は、完全ウェブ形式での開催を目指しました。現在の学会の様々な仕組みや体制は、先達の大変なご苦勞の積み重ねで整えられてきていますが、ウェブ開催のノウハウは何もなく、手探りの状態で準備を進めざるをえない状態でした。このような様々な課題が複雑に入り組んだ新しいケースこそ、P2M の出番です。先ず「ありたい姿」を描き、そのうえで、「プロファイリング」を行い、「戦略」を立て、各

プロジェクトの「アーキテクチャ」を設計して「スキームモデル」を完成しました。その間、計 5 回の企画・実行委員会の「プラットフォーム」は、ウェブ会議です。各プロジェクト遂行の「システムモデル」と、大会本番を迎えての「サービスモデル」は、本号の大会顛末記に詳述されていると思います。「価値指標」は、「量」より「質」にしました。大会当日のライブ講演・パネルディスカッションと、1 ヶ月間に及ぶオンデマンド動画研究発表・オンライン質疑は、これまでのリアル開催とはひと味違う、新たな価値を生み出せたように思います。こうして大会テーマの「危機を乗り越える P2M」を実現できたのも、学会関係者、早稲田チーム、参加者ひとり一人のお陰です。この紙面を借りて、改めて厚くお礼申し上げる次第です。ウェブ大会を通して、課題も数多く見出されました。それらは「ライフサイクルマネジメント」で、改善して参ります。

さて、本学会発足 15 周年でもある 2020 年の世界は、カオスそのもの。所謂、「超 VUCA」(Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity) の時代、まっただ中です。歴史の教えに従えば、ここであらゆる面で、一気にパラダイムシフトが進みます。そのような時代にこそ、P2M が必要とされます。前述のウェブ大会への P2M 適用は、ほんのささやかな事例に過ぎませんが、P2M の真価は、そのスケラビリティとサステナビリティへの対応力にあると思います。スケール面

では、一企業や一事業のレベルから国家や世界レベルまで、大小様々なスケールに適用できます。また、持続性の面では、3ステージモデルに基づくプログラム管理とともに、サービス開始後のライフサイクルマネジメントが有効です。まさに、SDGs (Sustainable Development Goals = 持続可能な開発目標) 達成のためのマネジメント体系と言えます。

今年5月に、私が本学会の副会長を拝命して以来、専ら目前のプログラム対応に追われる毎日でした。ここでもう一度視線を上げて、15周年を迎えた本学会が、将来目指すべき姿を思い描きたいと思います。記念すべきマガジン第10号には、亀山副会長の企画と尽力のお陰で、数多くの執筆者からの示唆に富んだ原

稿が寄せられました。例年とは異なる風景のお正月の中で、これらの原稿をじっくり拝読しながら、これからのP2Mの発展に想いを馳せたいと思います。それと同時に、自分自身にとっても今後の15年間に人生の集大成、と胸を張って言えるよう「パーソナル・プログラムマネジメント」のスキームを練りたいと考えています。

末筆ながら、今年1年間の皆様のご支援ご協力に深く感謝申し上げますとともに、皆様がお健やかで輝かしい新年を迎えられますよう、心より祈念申し上げます。

(2020年12月14日 受理)